

研究ノート

済州4・3事件に関する未体験世代の表象 —済州での予備的インタビュー調査—

玄 善 允

- 第1章 はじめに—未体験者の事件表象と事件の残響—
- 第2章 関連研究と用語の定義—事件の残響、非体験者と未体験者、未体験者の事件表象の間接性と創造性—
- 第3章 インタビュー内容の紹介—1960年代以降に済州に生まれ育った6人の女性の事例—
- 第4章 インタビュー内容の分析・考察の（1）—4・3による被害、タブーとしての4・3、4・3との出会い、4・3表象もしくは4・3との付き合い方—
- 第5章 インタビュー内容の分析・考察の（2）—文学的表象と未体験世代の事件表象との関連—
- 第6章 まとめにかえて—4・3表象の「民主化」を求めてのはるか長い道のり—

キーワード：済州4・3事件、未体験世代、表象、事件の残響、テキストとしての場

第1章 はじめに—未体験者の事件表象と事件の残響—

日本の植民地から解放されて間もない1948年に、韓国・済州で起こった大量殺戮事件である4・3事件、その評価は権威主義政治体制下で長らく強圧的に「暴動論」（共産主義者に扇動された民衆の暴動）一色だったが、その後の韓国民主化過程ではそれに対抗する「抗争論」（米軍政と新生韓国政府の暴圧に対する民衆の自発的異議申し立て）が台頭してからは両者が激し

く対立する中で、やがて「民間人虐殺論」（無辜の民の被害を焦点化し、その救済や治療の方策を模索）なども浮上するようになった¹。

そして、事件から約50年後になってようやく「済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復に関する特別法」（2000年）が制定され、それに基づいて『済州4・3事件真相調査報告書』（以下では『報告書』と略記）が確定するとともに「国家権力の不当な行為」について大統領が公式に謝罪（2003年）、さらには事件勃発の日である4月3日が「4・3犠牲者追悼の日」に指定されるなど（2014年）、政府のお墨付きで長年の論争と対立に終止符が打たれたかに見えた。ところが実は、それらと前後しての政権交代などの情勢変化も相まって、またしても論争が激しく再燃し、せっかくの『報告書』も正史として安定した位置を確保しているとは言えない状況である²。

したがって4・3事件に関連するあらゆる議論は、そうした論争・対立と無関係なはずはないのだが、本稿を第一歩として筆者が長いスパンで構想している「4・3に関する表象の研究」（以下では「本研究」とし、その一部に過ぎない試論である「本稿」と区別して用いる。なお、以下では括弧を外して、それぞれ、本研

¹ 4・3事件に関する評価の変遷については高誠晩2015 Aを参考にした

² 『報告書』をめぐる対立状況に関しては玄善允（2015 C）、及び、玄善允（2016）を参照のこと

究、本稿と表記する)ではそうした議論から意識的に距離を取る。というのも、本研究は4・3をめぐる対立要因の最たるものである「真実」の糾明という方向を取らないし、どんなものであれ特定の立場や特定の個人、さらにはその言説を特権化する方向に進むつもりがないからである。

本研究は、4・3事件の歴史的真相を探究するよりは、それが過去にどのように語られ、現在どのように語られているかを探究する。多様な4・3表象を「4・3の真実」というフィルターを介すことなく、とりあえずはそのままに受け入れたうえで、それがどういう要因で形成されたのかを考える。個人のものであれ集団のものであれ、表象一般もまた時代の趨勢や思潮、さらには表象主体の利害関係などから大きな影響を受ける。そこで、そうした影響関係を解きほぐしながら、表象個々のそれなりの「合理性」を明らかにするのが第一段階の目標である。そのうえで、そうした「合理的」な表象の多様な姿と4・3事件そのものとを対照することで、4・3の現代的意味を探るというのが、はるか彼方に待ち受けているはずの究極的な目標である。

因みに、先に触れた暴動論や抗争論その他の事件の位置づけの議論も表象の一つに他ならないのだが、それらは「4・3の真実」に収斂する、あるいは逆に、「あらかじめ想定された真実」から導き出された表象であり、本研究が対象とする多様性を本質とする表象の範疇には、少なくとも直接的には含まない。また、既に体験者の数々の貴重な証言が公開されており、筆者自身もその種の証言を収集・分析したことがある³。したがって、それらも本研究の究極的な対象に含まれるが、本研究の第一歩に過ぎない本稿では、それらはひとまずさておいて、非

体験者、その中でもさらに限定を施した未体験者と筆者が呼ぶ人々の事件表象の中に、事件の「残響」(後に触れる村上陽子(2015)からの借用)に耳を傾けるべく努めたい。

第2章 関連研究と用語の定義—事件の残響、非体験者と未体験者、未体験者の事件表象の間接性と創造性—

4・3事件に関しては多種多様で膨大な先行研究の蓄積があり、本稿は当然のごとくそれら全般の恩恵を受けているが、以下では本稿と直接に関連するものに限って言及する。

1) 関連研究—事件の残響

まずは4・3にまつわる文学的表象の研究である。本稿は必ずしも文学的表象に焦点を絞っているわけではないが、表象の研究という意味ではそれと重なったり隣接したりする部分が多々ある。しかも4・3の真実糾明運動においては、文学的表象が一般的な4・3表象に多大な影響を及ぼしたという歴史的事実もある。そこで、4・3の文学的表象やそれに関する研究、とりわけそれを総括的に扱っている金東潤(2003)を、インタビューと4・3にまつわる文学作品との関係を論じる際にガイドラインとして参考にした。

次いでは、高誠晩の一連の研究、特に高誠晩(2015A)である。高は4・3を生き延びた人々が公権力による近親の悔しい死に対して、公には強圧的に禁じられていても、自分たちが納得でき、そして生きる糧になるような意味づけをするための創意工夫を明らかにしており、本稿の問題意識と重なる所があると考えて参考にしたが、これについてはもう少し説明が必要だろう。高は4・3を生き残った人々、つまりは同時代者(つまり体験者)を主な対象者にしてい

³ 玄善允(2009)及び玄善允(2015B)を参照のこと

るので、未体験者を対象とする本稿とは対象が異なるように見える。しかし、事件「後」に事件の現場（済州）で（たとえ、そこを物理的に離れても）何らかの意味で事件の結果（主に束縛）を生きざるを得ず、否応なくそれを担うことになった人々による事件の表象という意味では、本稿とはるか遠いからでも響きあっていると考えたのである。

最後に、事件の未体験者による事件表象の探索というアイデアは、済州4・3事件を直接には扱っていない村上陽子（2015）から得た。村上は出来事、それを題材にして創作する作家、そしてその作品の読者といった三者関係における出来事の残響を軸にして、沖縄文学と原爆文学の諸作品を巧みに分析し、その関係性を未来に開いている。それに対して筆者は、事件、事件の痕跡が社会的環境や人間関係などに刻まれている現場（テキストとしての場）、そして事件後に事件の現場で生まれ育ち、成長の過程で事件の痕跡に遭遇してその残響に感応する可能性を持った後続世代（読者）といった三者関係を想定し、村上が言う残響のようなものを見出せるのではないかと考えた。それが十全になされるかどうかは定かではないが、本稿のテーマ設定に際して、村上の「残響」という言葉が時おり筆者に響いてきて、腰が定まらない筆者の背中を押してくれたことだけは確かである。記して謝意を表しておきたい。

2) 用語の定義の1— 非体験者と未体験者

本稿は4・3事件の非体験者、その中でも特に未体験者の事件表象を扱うと記したが、その非体験者と未体験者の弁別について説明しておかねばなるまい。

事件の非体験者というカテゴリーには、ほとんど無限の人々が含まれる。空間的に言えば、事件の現場だった済州島以外の朝鮮半島を含めた世界中の人々ということになる。しかし、

4・3事件になんらかの意味で関与的な人々、つまり、当人の意図とは関係なくその事件の影響を免れがたい人々という限定を施せば、済州で暮らす人、そして済州に何らかの縁のある人々、例えば朝鮮半島や日本に居住する済州人、そしてそれをさらに広げて国民国家の枠で言えば、韓国人もしくは朝鮮人総体ということになるだろう。

また、そうした空間的な距離がもたらした非体験者とは別に、時間的距離がもたらした非体験者もいる。済州人であっても4・3以前に亡くなった人々までもその範疇に入れるわけにはいくまいが、4・3当時にはまだ存在していなかった済州の後続世代、つまり遅れてきた済州人たちのことである。

本稿が対象とするのはその種の人々であり、本稿ではそうした非体験者を、空間を異にした非体験者と区別して、未体験者と命名して、その人たちの4・3との関係を探ることにした。事件との長年のタイムラグの後にいわば遅れてきた済州人として、事件の現場に刻み付けられたなんらかの痕跡によって遅まきに事件のことを知り、数々の努力や事件の後遺症がもたらす様々な軋轢などの経験によって、事件についての一定の表象を形成するようになった人々、つまり未体験者の事件表象の輪郭を把握することを当座の目的としている。なお、事件を知ってからそんなことには拘泥しないし、自分とはまったく関係ないと言う人々もいるだろうが、その種の人々もこの範疇から排除されはしない。そんな人々たちでも、済州という事件の痕跡がいたるところに刻まれた場に生きている限り、或いは異郷で暮らしていても、血縁、地縁関係を完全に絶たない限り、4・3がもたらした何ものかと関係なく生きることは難しいというのが、済州4・3事件と済州の現在との関係の一面ではなかろうか。

3) 未体験者の事件表象の間接性と創造性

次いでは、未体験者の表象に関する筆者の基本的な考え方について述べておきたい。

その表象は様々な意味で間接的である。先ずは、表象というものはそもそもが再現であり、二次的もしくは間接的で、事件そのものとの間には「誤差」が不可避である。次いでは、未体験者の問題がある。未体験者は事件の体験を直接に表象できず、体験者の表象（或いは、体験者の表象を基礎データとして未体験者が形成した表象）を媒介にして、その表象のさらなる表象を形成する。場合によっては、何重にも間接的になりうる。

こうした間接性のゆえに、そうした表象は「真実」を前提としてそのフィルターにかければ、信憑性を少なからず失ってしまい、軽視されがちである。

しかし、本論は表象が本来的に備えるそうした間接性をむしろ尊重し、そこに焦点をあてる。幾重にも間接的な表象に見え隠れする「事件の残響」を捉えようとする。事件の残響に感応することによって形成された表象は、事件の再現としては「まがいもの」で、いわゆる「真実」の究明とは程遠い。しかし、後世の者たちが事件を各人各様に創造的に生きようとする模索に他ならない。そうした模索の姿、或いはそうした模索の困難さの輪郭を本稿は捉えるべく努める。

もしそれに成功すれば、そうして捉えるに至った躊躇いに満ちた模索の輪郭、つまり後世の人々の表象は、遡って、事件が備えていたに違いない重層的な意味の一端を照射してくれるかもしれない。そうした道筋は事件の真実へと直線的に進むのではなく、事件がもたらした様々な表象の分析を通じて、外側から、そして遠くから、まるで螺旋を描くように迂回をくりかえしながら事件に接近することになるだろう。しかし、それはあくまで本研究の究極の目標であ

る。その第一歩に過ぎない本稿はその前段階、つまり未体験者による事件との遭遇の経験と、各人の人生におけるそれらの位置づけに関する証言に耳を澄ましたうえで、それを分析し、未体験者の事件表象の輪郭を把握しようとするに過ぎない。

第3章 インタビュー内容の紹介— 1960年代以降に済州に生まれ育った6人の女性の事例—

1) インタビューの概要とその資料的価値についての留保

未体験者の事件表象の輪郭を知る為に、およそ1960年代以降に済州で生まれ、物心ついたころには事件から20年ほど経過していた世代で、その後も主に済州で暮らしてきたことを条件としてインタビューを探し、その結果として6名のインタビューを行うことができた。その6名は、上で述べた条件通りに、1962年から1975年の間に済州で生まれ、その後も済州で暮らしてきたこと以外に、大学、大学院を経て、現在は大学もしくは研究機関に関連する職についている女性というように、多くの共通性を持っている。しかし、その共通性の多くは、日本で生まれ育ち日本在住の筆者のネットワークを通じてコンタクトが可能で、かつインタビューを快諾していただけたのが偶々その種の人々だったにすぎず、筆者が意図したことではなく、むしろその共通性、言い換えれば、一種の偏りは、この調査の欠陥と見られかねない。ついでに更なる共通性を挙げれば、全員が済州島北部地域の人々で、済州の南部地域（漢拏山の南側に位置する地域なので、山南とも呼ばれる）や離島を故郷とする人はいなかった。

以上でも推察できるように、今回のインタビュー調査は相当に変則的である。しかも、以下で紹介するインタビュー内容は、インタビュー

の現場（2015年8月済州）で筆者がとったメモと追加質問を電話やメールで行ったうえでテキスト化して当事者に提示し、加筆修正なども含めて当人に確認してもらったうえで、公表の許可を取り付けたものであり、録音はとっていない。済州では4・3事件はいまだにセンシティブな問題で、録音を取るとなると証言内容が制限されはしないかと懸念したからである。

以上のように今回のインタビュー結果は、資料としては数多くの限界を否定できないし、総計6名にすぎないので量的調査としての価値がないばかりか、何らかの代表性を想定することもできない。

しかし、そうした資料的価値の限界を忘れさえしなければ、今後の本格的な4・3事件の表象に関する予備研究として活用できる部分が少なからずあると考えた。

尚、質問項目の作成に際しては、4・3に関する先行研究の数々によって形成された一定の知識と想像が大いに関与しているのだが、それについてはことさらに言及することもないだろう。ただし、先行研究もしくは4・3に関する「常識」と、今回の証言との異同・偏差に関しては分析・考察の際に言及する。

質問項目はおおむね以下のとおりである。

- ① インタビュー者の属性。
- ② 4・3による家族、親族その他の被害状況について知っていること。
- ③ 4・3について家族や親族内では語られていたのか、もしそうなら、どのような語られ方だったのか？
- ④ いつごろ、どのような形で、4・3を知り、それについて当時、どのような感じ方をしたのか？
- ⑤ その後、4・3に対してどのような関わり方をしてきたのか？
- ⑥ 年を取るにつれて、その態度に変化があるのか否か？

⑦ 4・3に関しての感じ方、考え方について最も影響を与えた事柄、人物、著作物など。

⑧ 現時点における4・3に対する見方、或いは、4・3を巡る様々な状況に対する見方。

インタビューでは必ずしも上記の質問項目のすべてに答えてもらえたわけではない。また、実際の証言内容と本稿で紹介する内容との間には異同があるからこそ、「インタビューの紹介」ではなく、「インタビュー内容の紹介」と表記している。例えば、本稿では、4・3に直接関連する事項に限って、しかもそのエッセンスに限って紹介している。したがって、興味深いデテールもその多くは割愛せざるを得なかった。例えば、本人が現在、引き受けている祭祀などの話などである。そこには、済州におけるこの世代の人間関係に関する常識などが垣間見られる。そして、おそらくは4・3とも関連する済州の伝統的ネットワークを把握する手掛かりになるものと思われたが、予めそれに対応する気持ちの準備をしていなかったもので、うまく話を引き出せなかった。再度のインタビューで補充したうえで、別の機会に紹介・考察することにする。

2) インタビュー内容

以下ではインタビュー内容を紹介するが、分析・考察の章でそれら個々の事例について述べる場合には、事例①・・・事例⑥のように表記する。そして、例えば事例①とは、文字通り事例①という意味の場合もあるが、事例①の証言者を指している場合もある。コンテキストで十分に理解可能と判断してそのように表記したが、証言者からすれば少々乱暴に映るかもしれない。記して、ご理解とご寛恕をお願いしたい。なおインタビュー内容紹介文中の（ ）内は、読者の理解に一助になるように筆者が付け加えた。

事例①：1962年、旧済州市の西の外れの地域生まれ。

祖父の兄とその一人息子が4・3の時に連行されて行方不明になった。今は4・3平和公園に位牌があるが、それも最近になってからのことである。祖父の父には祖父（次男）とその兄（長男）の二人の息子がいたが、長男（祖父の兄）とその息子が行方不明になった後に、次男である祖父が20代で日本で亡くなったので、その一人息子である父が唯一の子孫となった。今では私の二番目の弟がその祖父の兄の家族の祭祀や名節をすべて引き受けている。

幼い頃は周辺が4・3関連のことはすべて内緒にするという雰囲気だった。村に警察を退職した老人（同窓の友人の外祖父）がいて、周りの人々はその人が昔、たくさんの人を殺し、その殺しの現場だったところ（海の近くで、一周道路辺）で交通事故が頻繁に起こるのは、怨恨が多いからだ、声を落しながら語るのを聞いたことがあった。それを聞いた時には何のことかわからなかったが、後に高校生の頃に「順伊おばさん」を読んでから、それが4・3に関連したことであることに思い当たった。

最初に4・3事件という言葉聞いたのも、高校生の時に「順伊おばさん」という小説が4・3事件に関連していると聞いてからのことのように記憶している。しかしその時には、4・3事件というのは、北朝鮮のスパイが山間の人々を巻き込んで政府から鎮圧された話だと思い込んでいた。

そして30代の後半（1990年代）になってから、祖父の兄とその息子の祭祀の時に、その人たちを4・3の犠牲者として申請すべきだということが話題になった。

30代後半には4・3関連の遺跡地を団体でフィールドワークし、新聞記事などを読んで、真実、つまり武装暴徒たちを政府が鎮圧したのか、或いは、政府が無辜の島民たちを殺傷したのか

について知ろうと努力した。

生き残った者とその後続世代がすべきことは、誰が正しいかということも重要だが、それよりもむしろ歴史の1頁としてしっかりと記憶し、二度とはそんな悲劇が起こらないようにしなくてはならないと考えている。4・3に関しての考え方で影響を受けたのは、4・3平和公園です。

事例②：1966年、済州島の北西地域生まれ

親戚、家族に被害はなく、父は4・3時の城（4・3 当時に軍警の主導で村民たちを動員して作られた一種の戦略村のこと）の管理の役を、警察から命じられて行っていた。一度は、西北青年団に豚を奪われて、その豚が逃げて父の家に戻ってきたので、大事になりかけたが、なんとか助かった。家その他で、4・3について耳にすることはなかったが、それがタブーだったからとは思っていない。

1985年に大学生になった頃には、玄基栄の「順伊おばさん」、玄吉彦の「龍馬の夢」が学生の必読本だったこともあって、読んだ。ただし、「順伊おばさん」を実話に基づくものとして読んだわけではなかった。

当時は民主化運動で、大学もデモばかりだったが、自分は参加しなかった。マルクス主義の本などが非合法に出回り、一種のファッションになっていた。このような本を読みたいとか、文学的に優れていると思ってのことではなく、社会的な意識が全般的に高まった時期だった。

4・3についてはあくまで歴史であり、自分の生活とは関係ないものとして考えている。ただ、あってはならないこと、世界で4・3ほど異常なことはないとは思っている。人間の弱さ、強さ、悪さ、集団の悪さなどがすべて露呈してしまった。

卒業後に日本に留学して、むしろその日本で4・3について多くを知って、1997年に帰国した。

4・3を素材にして書かれた小説は大人になってから読んだので、特に影響をうけたわけではない。

被害者や遺族個人の事情を配慮すべきだが、文学に導入したり、4・3巡礼などは積極的にしていくべきだと思う。

事例③：1966年、旧済州市から少し西に行った地域生まれ

家族に被害はない。4・3はタブーだったような気がします。育つ過程で一度も家族や親戚から4・3の話聞いたことがないのですから。4・3が新たな局面を迎えていた頃には（民主化が進行し、4・3の真相究明が始まった頃）、私は日本にいたのでよくわからなかったのです。帰郷してみると、状況がすっかり変わっていました。大学院で勉強していた2008年に4・3国際学術大会で通訳をすることになって、資料を通して遅まきながら知ることになったのです。いきなり、それもあまりにも多くの話にまみれて、整理がつかない状態でした。

その後、2009年頃にソウルの女性学を研究している教授の依頼で、老婆のインタビューをしながら、4・3を理解するには多様な視角があるということを知ることになりました。また、通訳として、毎年、開かれる4・3の追悼行事や学術行事、フィールドワークなどに参加する機会が多くあります。

二度と起こってはならない不幸な歴史です。いまだに被害者と加害者の感情的な争いに流れやすく、本質を忘れる傾向がみられることが、残念です。4・3被害者の老婆たちの話に大きな影響を受けました。しかし、その他では、遅ればせに知るようになってみると、各種調査、インタビュー、ドキュメンタリー映像に一举に接することになって、何か一つが強く記憶に残ると言うことはありません。実際に経験した人達は複雑な当時の情勢が分からないでいながら

も、現実を淡々と受け入れる姿を示しているのに、次の世代は、急いで解決しようとする姿勢が強すぎたり、知恵が不足しているように思えます。東アジアの情勢がまたもや揺れ動いている現在、過去の辛い経験を無駄にすることがないように、冷静な判断で新たな論議の場に通導して行かねばと思っています。

本当のことを言うと、あまり真剣に考えたことはないのです。2～3回被害者のインタビューをただけでどうにも耐えられない自分が恥ずかしくて、あまり考えないようにしたのかもかもしれません。

事例④：1968年、済州島の北東地域の海岸村の生まれ。

親戚の犠牲者のことは聞いたことがありますし、我が家の曾祖母が焼け死んだという話も伯母から聞きました。加害者、つまり村を襲撃して被害をもたらしたのは、共匪、「赤」だったという証言をたくさん聞きました。

母親からもときどきそんな話を聞いて、「共匪」、「ペルゲンイ（日本語における差別的な「アカ」という語に相当する。しかも、権威主義政権下で、それは牢獄、あげくは死刑をも含意するものだった）」に対する恐怖感がありました。そして同じ村で、その「共匪」、「ペルゲンイ」の家族が誰かといった話もよくありました。しかし、それらの家と付き合わないというわけではありませんでした。「あの共匪の家の嫁は料理が下手だ」といった調子で、話の中に出てくる程度だった。

大学に入学して玄基栄の「順伊おばさん」を読み、民衆歌謡「眠らざる南の島」を聞きながら、4・3のことを知るようになりました。でも当時は、反共教育を受けていたからそうなのか、或いは、勉強不足で正確に理解できないままに、4・3とは日帝植民地下で、朝鮮半島が米国とソ連によって二分され、不幸な民衆たち

が犠牲のヒツジになったという程度の理解だった。

4・3の運動に直接には関係はしていないけれど、済州道民として4・3に関する主体的な認識をしなくてはならないと感じています。4・3で失われた村などを見学したり証言を聞き、当時の村の風景などインタビューして、「記憶の中の風景」に関する文章を書きたいと思っています。

今でも犠牲者の家族の中には、自分の家族は「共匪」によって犠牲になったのだから、4・3平和公園にその連中（「共匪」）を共に安置するのは不当だ」という意見も多くあったりして、犠牲者再審査に関する論議が終わらない状況が続いており、そのことで深く悩んでいます。

4・3に関しては、玄基栄の「順伊おばさん」、在日同胞の親戚の伯父さんの犠牲、北村に住む老婆の証言などから最も大きな影響を受けました。

事例⑤：1971年、旧済州市から少し東へ行った地域生まれ。

祖父が油を運搬するタンカーの船員で、たまたま外国に出ている間に、済州では4・3事件が起こって危険だという連絡を受けたので、済州に戻らずに、同じ船に乗っていた仲間と一緒に日本の静岡に逃避したそうです。そこには全く縁者がいなかったけれど、朝鮮人社会に入り込み、朝総連に属して活動していたようです。その後、祖父は1980年代に朝鮮総連関係者の故郷訪問団の一員として済州に初めて戻ってきました。

父は1943年生まれで、4・3が始まると残された祖母（父の母）と妹（2歳下）の3人で、警察と山部隊の双方に追われて逃げ回らう

に、父と父の妹がはしかにかかり、妹は死亡（当時6歳ぐらい）し、そのショックで、祖母（父の母も）も死亡したので、その後父は父の祖母と二人で苦勞して暮らしました。22歳で結婚しましたが、その3年後に一緒に暮らしていたその祖母も亡くなりました。

父は祖父を非難するようなことは一度も言いませんでした。ただ、「祖父がいたら、自分も少しは勉強もできて、こんなに苦勞はしなかっただろう」といった程度のことは言っていました。

でも私は、祖父と初めて会った際に、祖父を厳しく責めました。すると、祖父は父には申し訳ないと言っていました。

父は4・3についても、両側から追われて生き延びるために懸命だったというだけで、どちらが悪いといったことは言いませんでした。

成長するにつれて、4・3について少しずつ知るようになり、特に高校2年生の時に、韓林和『漢拏山の空赤く焼けて』⁴に感動しましたし、大学生になってからは、「順伊おばさん」を読みました。しかし、4・3に関して、それが国の責任ともパルチザンの責任とも思いません。

結婚後には、祖父の一番下の弟で4・3の際に14歳で亡くなった方の祭祀を引き受けています。

実家の父の叔父（当時28歳だった）が、幼かった父の目の前で警察と軍人と一般人などに連れて行かれ、済州市頭豆で殺された、と父から聞いたことがあります。

4・3については詳しく知るようになってきましたが、いわゆる運動圏の人々の4・3運動には違和感があって、距離をおいていることもあって、その人たちからは煙たがられているよ

⁴ この小説のタイトルの日本語訳については、大山益夫（1996）に倣ったが、それ以外の文献タイトルなどの

訳はすべて筆者による

うな気配もあります。

事例⑥：1975年、済州島の北東地域の中山間村生まれ。

祖父が軍人に連れて行かれて銃殺されたと聞いています（1949年12月11日、月汀国民学校にて銃殺）その祖父は月汀国民学校を中退して、大阪の小学校に入学し、卒業後は大阪の商業学校に進んで卒業後に帰郷し、就職先を探しながら、書堂のようなところで子どもたちを教えていた。その頃に、起こったことである。

平時に家で4・3に関する話を沢山聞くことはできなかった。ただし、祭祀の日や草刈り⁵の際に、親戚の人たちが集まると、その話が出てきて、大人たちの話を聞きながら、祖父がどのようにして亡くなったのかを知っていた。

4・3に関しては知らなかったが、済州で人々がたくさん亡くなった大事件があったことは、集落で同じ日に祭祀が多かったのも、幼い頃から知っていた。4・3に関して具体的に知ることになったのは、大学生になって韓国史の授業を通じてである。またその頃に、4・3の被害申告の受付があって、父を手伝って祖父の被害申告書を作成しながら関心を持ち、いろんな本を探して読んでみた。

その後、4・3に関心を持つようになったが、具体的に何らかの活動をしているわけではない。4・3に関して特に大きな関心を持つようになったのは、玄基栄の小説「順伊おばさん」を読んでからである。それ以前にも、済州でかつて何か大きな事件があったことは知っていたが、小説を通じて、当時どのような状況だったのか、少しは理解できた。それ以後、いろんな小説や「4・3は語る」（済民日報4・3取材班による連載記事とその単行本、日本語訳は『済州島4・3事件①～⑥』新幹社）などの

証言報告書などを探して読むようになった。

どちらが加害者でどちらが被害者といったように分けることが可能な明白な境界はないと思っている。

大学院生の時に韓林和や玄吉彦の小説を探し求めて読みましたが、それらが学生の必読書だったというわけではありませんでした。玄基栄が「順伊おばさん」で最もよく知られており、そのほかに4・3作家としては呉成賛がいますが、玄吉彦、韓林和、呉成賛などは4・3に関心がある人々や、文学などに関心を持つ人々に知られているだけで、他の一般の人たちはあまり知りません。また、在日の金石範、金時鐘も、4・3関連の研究をしている人々だけが知っていて、一般人たちは良く知りません。

（追伸1）しかし、周囲の先生方に尋ねたところ、現在の大学生はどうか分かりませんが、私より以前の世代の大学生たちには、玄吉彦や韓林和、呉成賛なども済州島の小説家としてよく知られていたとのこと。そして金石範も『火山島』で以前の世代の大学生には知られていたとのこと。

（追伸2）50代（1960年代初めに出生した世代）の新聞記者経験のある方の話によると、その仲間たちの間では、金石範の『鴉の死』や『火山島』はすごくよく読まれていたとのこと。

以上がインタビュー内容のすべてなのだが、最後の（追伸1）、（追伸2）は、事例⑥に対するメールによるインタビュー内容の最終確認の直後に、事例⑥から立て続けに届いたメール内容である。

⁵ 秋夕の前に一族の墓の草刈りを一族総出で行う。済州

の最大の行事

第4章 インタビュー内容の分析・考察の

(1) —4・3による被害、タブーとしての4・3、4・3との出会い、4・3表象もしくは4・3との付き合い方—

以上のインタビュー内容に関して、「4・3による被害」、「タブーとしての4・3」、「4・3との出会い」、「4・3表象もしくは4・3との付き合い方」など、インタビューの意図にしたがった指標を立てて、項目別に検討してみる。

1) 4・3による被害状況—その多様性という事実とそうした多様性の認識の一般性

4・3による被害については海岸地域か中山間地域か、東部地域か西部地域かによって大きな違いがあるほか、個々の状況によっても大いに差異があると言われているが、このインタビュー結果もそうした一般論が妥当する。

インタビューーたちが生まれ育ったのは先にも触れたように、事例②、事例③、事例①、事例⑤、事例④⑥といったように、漢拏山の北側の地域を西から東へと巡回していくかのような配置になっている。それはもちろん偶然なのだが、そのうち、家族親族の被害について証言していないのは、事例②と事例③だけで、その他はすべて近親者に被害があったとしている。そしてその加害者が軍警の場合もあれば「ペルゲンイ」の場合もあるし、その両者の場合まである。さらに言えば、事例④と事例⑥は同じ済州北東部地域で生まれ育った人たちなのだが、その同じ地域でも事例⑥のように中山間部落では軍警による被害が、事例④のように海側の集落では「ペルゲンイ」による被害が云々されている。

このようにたった6事例だけでも、地域によって、また村によって、さらには家族によって、被害の有無、そして軍警かパルチザンかのどち

らか、あるいはその両者による被害といった差異がある。しかも、被害について証言していない二つの事例でも、証言者が聞いていないだけのことで、実際にそうだったのかどうか判断できそうにないというのが、インタビューした際の筆者の感触だった。

そうした4・3による被害の有無を含めた多様な現実、そしてそれについての認識が少なくとも済州現地では、よほどに硬直した暴動論派や抗争派の人々を除いては、広い範囲で共有されているようなのである。事実としての被害の多様性、そしてその事実認識の済州現地における普遍性、ここではこのことをしっかりと確認するにとどめて、それに関連する更なる議論は、本章の末尾で本章のまとめの役割を果たしている「4・3表象、或いは4・3との付き合い方」の項で行うことにする。

2) 4・3はタブーという言説について

次いでは、これまたほぼ常識とされている「(権威主義政府の支配下では)タブーだった4・3」という言説とインタビュー内容との相関性について考える。

それについては、事例①と事例③のように「タブーだったと思う」人もいるし、その反対に事例②のように「タブーなどではなかったと思う」と語る人もいる。そのほか、タブーという言葉に反応しなかった人もいるし、「タブーだったけれど、環境などでなんとなく感知していた」というニュアンスの人もいる。要するにバラバラということになりかねないのだが、実はそうでもなさそうな感触もあるので、もう少し踏み込んでみる。

例えば事例⑥のように、村のほとんどの家々で同じ日に祭祀があったので、おおっぴらには語られなくても、大っぴらに語ってはならない事件があったことが伝わってきたという場合もあれば、タブー自体を感知できないほどだった

のだからまさにタブーの極致だったという感じの人もいる。前者は最も若い事例⑥で、後者は年齢が高い事例①と事例③の場合なので、世代差も関係しているのかもしれないと思えるが、この程度のサンプル数で即断は慎まねばなるまい。それにまた前者の①の場合も、それとして語られていないのだから、やはりタブーだったということになる。

そのほか、例えば事例④の場合は、「ペルゲンイ」による被害や、村にいる「ペルゲンイ」の家族についての話を母親から聞いていたというのだから、タブーではなかったということになりかねないのだが、加害者が「ペルゲンイ」とされている限り、つまり権威主義体制下の「暴動論」を補完するような語りがタブーになるはずがないからというだけのことだろう。また事例②などは、家族内などでそんな話は聞いたことがないが、それはタブーだったからではないと思うと語っているが、その証言を額面通りに受け取っていいのかどうか、迷うところである。証言のコンテキストから察するに、事例②の家族が状況に敏感で時と場合にあわせて柔軟に身を処していたおかげで、ひどい被害を受けなかったが、それでもやはり忌まわしいことが多くて思い出したくない過去だから、語ることをほとんど無意識に避けたのではないかと、推察するくらいのことは許されるのではないだろうか。

ともあれ、全体としてはやはり、少なくとも権威主義的政府支配下では4・3における官憲による被害を云々したり、それをイメージさせることは陰に陽に厳禁されていた、つまり、一定の民主化が達成されるまでは、4・3は済州を含む韓国ではタブーだったと言うべきなのだろう。

ただし、筆者や本稿に接する方々のように、

生まれてこの方日本で居住している人々がタブーという言葉で想像するものとは、相当に違っていったような気配もある。それについて考える際に参考になるのが、小説「順伊おばさん」の世界であり、それについて論じている金東潤の議論なのだが、その他には例えば既に触れたように、高誠晩（2015A）が参考になる。高は、4・3における公権力による近親の被害（殺害）に対して、生き残った近親者たちは、公的領域（除籍謄本のような公的書類）では事実通りに告知したり記すことができなくても（タブー）、「族譜」（家系図）や墓碑という公と私の狭間にあるグレーゾーンでは、ぎりぎりの形で真実をうかがわせる記述をなすことによって、死者の無念を晴らすと同時にその死を自分たち生き残った者が納得できるものにする努力を継続してきたことを明らかにしている（真実の語り、伝承）。つまり、4・3は公的時空においてはタブーだったとしても、口に出さずとも互いに一定の理解が通じる空間、すなわち、よそ者がいるはずがない時空、例えば、親族や村落共同体の核ともいべき親族とその周辺の人たちが織りなす親密な時空、その極致は祭祀などの場ということになるのだが、そうした場では十二分に、そして繰り返し語られてほとんど一族の神話のようにになっていた時代があったらしいのである。そうした時空での4・3に関する語りを、金東潤は玄基栄の「順伊おばさん」に関する作品論において、済州伝統の口碑文学の系譜上にある「祭祀の家の文学」としてテーマ化して興味深い議論を展開している⁶。ここではその議論に立ち入らないが、とにかく権威主義政治体制下でも4・3は特定の濃密な関係世界では十全に語られていたという事実を踏まえたうえで、「タブーとしての4・3」という言説を理解しておきたい。

⁶ 金東潤（2003）111-127を参照のこと

ところで、その共同体の中核部分における事件の伝承という伝統も、「順伊おばさん」や、その語り手の世代には確かに存続していたのだろうが、今回のインタビューーにはそうした時空の気配は相当に薄くなっているか、ほとんど消失しているように感じられた。少なくとも4・3にまつわる語りに関しては、それが伝承された気配がほとんどないのである。

事例①では、祭祀の場で4・3の親族の犠牲者についての話し合いがなされたといったことが語られているが、それは民主化の成果として公的に被害申請などが受け付けられるようになって以降のことであり、その種の話話がタブーとされていた時代に、そうした話題に接した気配は皆無なのである。だからこそ、例えば⑥の当事者は「タブーだったように思う」と公私領域にわたっての「タブーとしての4・3」について語っているのだろう。

以上のような、「順伊おばさん」における親密空間の存在と今回のインタビューーたちにおけるそうしたものの不在（あるいは存在感の希薄さ）という差異、それには少なくとも二つの理由が想定できる。一つは、「順伊おばさん」の語り手の世代と、今回のインタビューーの世代の世代差、その間に伝承の断絶が起こった、つまり、そのような親密空間がなくなったという可能性である。もう一つは、祭祀で語りの場に参入できるのは基本的に男性だけで、女性はもっぱら食事その他の準備に忙しい。そこで、かつての女性たちは別の時空、例えば、そうした祭祀の準備をしながらの語り、そしてそれをも含めた相互扶助の共同労働の過程での語りを伝承の場としていた⁷。

ところが今回のインタビューーのような世代、それも高等教育まで受けて、その後も高等教育機関などで職を得て暮らしている女性たち

の場合には、それが既になくなってしまったという可能性である。或いはそれら二つの理由が重なっているのかもしれない。それを実証する手立てを筆者が持っているわけではないので、ここでは「順伊おばさん」の世界（その語り手に代表される世代、つまり作者たる玄基栄たちの世代）とそうした作品に思春期になって遭遇したインタビューーの世代との差異、その間に済州のかつての共同体の伝承機能が失われた可能性を強調しておくにとどめる。

3) 4・3との出会い

4・3との出会いとしては、済民日報の10年にわたる連載記事である「4・3は語る」や文学作品が挙げられているのだが、それについては別に章を立てて後述するのでさておくとすれば、やはり、そうした情報に接することができるとような状況を創り出した全国的な民主化運動の潮流が最も重要である。権威主義政権支配下で強圧的に隠蔽されてきた歴史、それが民主化運動のうねりの中で、ようやく語られるようになったおかげで、「隠された正史としての4・3」との出会いが各人各様になされている。

事例⑥では、地縁、血縁などある程度は顔を思い浮かべることができそうな人間たちにまつわる事件として、また事例①では、幼いころから日常的に接していた場所で、それも友人の家族による残酷な事件といった形で身近なものとして発見される。

ともかく、彼女たちの4・3との最大の出会いは、時代の風潮、とりわけ民主化運動の高揚がもたらしたものであるというごく常識的な事実と、当時の雰囲気を確認するために、事例④が証言している当時の民衆歌謡である「眠らざる南の島」（作詞作曲アン・チファン）を紹介しておきたい。歌詞だけでも当時の大学生を取

⁷ 女性たちの語り、伝承の空間については玄善允（2015

B）で詳述しているので参照のこと

り巻いていた雰囲気を彷彿とさせる。

孤独な大地の旗が／ひるがえる遠き島／暗闇
を突き破って咲き出る／血に染まった菜の花
よ／赤黒い夕日を浴びて／花びらはしおれて
も／歳月に過ぎゆくにつれて／花の香りはさ
らに広がろう／あー 反逆の歲月よ／あー 慟
哭の歲月よ／あー 眠らざる南の島／ハルラ山
よ⁸

この歌は済州4・3事件を経験した済州の地の苦痛を歌っており、1980年代の韓国の大学街ならどこでも歌われ、大学生の愛唱歌として大人気だったそうである（事例④による解説）。暗闇、はるか遠くの孤独の大地、血に染まった菜の花、赤黒い夕日、反逆、慟哭といったように、若者のヒロイズムを鼓舞して闘争へと駆り立てる道具立てが十分に揃っている。そのような雰囲気の後押しを受けて若者たちは民主化、そして4・3の真実の解明のために戦ったのであろうが、そうした時代がもたらした特権的な高揚は、日常生活において4・3と付き合うこととは相当な距離があるに違はなく、高揚の後には何の変哲もない日常が再開する。その時になって、そのヒロイズムはどのようなことになるのか、そのあたりについては、後の「4・3表象もしくは4・3との付き合い方」の項で言及する。

因みに、時代の雰囲気「変化」についても確認しておきたい。インタビューはほぼ同じ世代と言っても、彼女たちの世代にあっては、10年ほどの差異は、政治社会的にすこぶる大きなものがあつた。

今回のインタビューたちはほぼ同世代とは言っても、最大で1962年出生から1975年出生と

いうように13年の差異がある。そしてそうした彼女たちの大学生時代とその間の韓国における政治情勢を考慮すると、環境が激変している。1962年生まれだと大学入学は1980年代初頭で、その1980年には4・3を彷彿させるような国家権力による民衆虐殺事件である光州事件が起こり、その後にはその虐殺の張本人であった全斗煥政権が朴政権をしのぐ強圧的支配を1988年まで続ける。

他方、1975年生まれだと大学生活は1990年代初頭から中盤ということになり、1987年の韓国を揺るがした民衆抗争、その結果として権威主義体制を支えていた張本人でもあった盧泰愚による「追い込まれた」民主化宣言が続くといったように民主化運動が最高潮だった歳月は既に過ぎ去っていた。それに伴って4・3をめぐる雰囲気も一変しており、それが済州の特に当時の若者たちには決定的な影響を及ぼしていただろうことは推察に難くない。そうした時代の落差を、例えば事例③はその間にたまたま済州を留守にしていたこともあって、客観的に目にしている。「済州に帰ってみると、驚くほどの変化で、一挙に信じられないほどに大量の情報の氾濫に見舞われて当惑し、その当惑は今なお続いている」と言うのである。

その他にも、事例⑥の追伸1と追伸2も、少しばかりの年齢差で、4・3に関連する常識がずいぶん異なることがよくわかる。それに加えて、「運動圏」の内側と外側とでも大きな差異があることが歴然としている。

彼女たちの4・3の出会いと認識の導きの糸としてはほとんど口を揃えて挙げている文学作品については、第5章で詳細に言及する。

⁸ この歌詞の日本語訳者は不明で、筆者は以下のサイトから引用した。 <http://mitamitsu.cocolog-nifty.com/>

sasurai/2013/04/post-9a04.html。記して感謝する

4) 4・3表象もしくは4・3との付き合い方

彼女たちが現時点で4・3をどのように考えているのか、或いは、4・3に対してどのような立場にあり、今後どのように4・3と付き合いっていくつもりなのか等については、言葉が相当に一般的(「あつてはならない悲劇」、「済州人としての主体的認識」など)、あるいは曖昧(「どちらが加害者で被害者といった明確な線引きは不可能」)で、判断留保の趣が強く、それを悪く言えば責任回避の趣もある。しかし、そうしたところにこそ、様々な要因の複合から導き出された彼女たちなりの4・3との付き合い方があり、そうした付き合い方の実践こそは彼女たちの4・3表象なのかもしれないという立場に立って、以下の議論を続ける。

4・3真相糾明運動に積極的にかかわっている人は、今回のインタビューには一人もいない。むしろ、そうした運動に距離感を表明しているのが事例⑥、実に微妙な言い回しで違和感を表明しているのが事例③、言葉で表明された4・3運動に対する批判的もしくは留保的な態度はその2例なのだが、実はその人たちでさえも、そうした運動に敵対的かと言えばそうでもなさそうで、それなりの協力関係を維持しながらも、一定の距離を置くといった感じである。そしてそれは、その二人に限られず、ほぼ全員にあてはまりそうなのである。

そうした曖昧さ、或いはバランス感覚のようなものは、次の事実にも窺える。彼女たちは、4・3真相糾明運動が旗印にしている「4・3の真実」といったものに対しては関心が薄そうなのである。ほとんど全員が4・3に対する強い関心を表明しておりながらも、そうなのである。その理由は何かについて、確実な論拠を提示して議論を展開するのは至難の業なので、これまでの議論に基づいて筆者の仮説を述べておきたい。

まず何よりも、既に触れたように、被害状況

が実に多様であるという事実認識に基づくのだろう。そうした多様性の認識があるがゆえに、唯一絶対の真実(国家犯罪なのか、蜂起側の犯罪なのか)に基づく善悪の二項対立を免れるためにも判断留保が要請される。だからこそ曖昧に映りかねないのだが、実は、そうした判断留保にはむしろ積極的な側面もある。

というのも、その曖昧さ、或いは判断留保は、「4・3の真実」がどうであれ、その「真実」なるものが現在の済州社会を引き裂いているという認識がもたらしたものである。それを裏返して言えば、その「真実」なるものは、それを主張する人々の意図がどうであれ、しばしば独善的、党派的、政治的に映ってしまうということがあるのだろう。最も明確に「運動」に違和感を表明している事例⑤の態度も、おそらくはそうしたところに起因しているのだろう。

そしてそうした態度はまた、4・3に関する調査研究の一定の蓄積を前提にして、現段階で何が求められているかという現実的な問題意識に基づくという側面もあるのだろう。それが最も明瞭なのは③である。既に真相糾明はある程度なされており、それを基盤にして多様な人々の考えをそれなりに許容して和合の道を歩むべきだという判断がうかがえるのである。それは決して、真相究明の継続を否定するものではない。しかし、引き裂かれた現在の済州社会を縫い合わせるのは、必ずしも真実や正義という大文字の言葉やスローガンや思考方法や心情ではなく、多様な議論を戦わせるにしても、ぎりぎりのところでは判断留保をして他者を気遣うような寛容な精神である、といった深慮が発揮されているように思える。

そして、そうした「深慮」は少なくとも二つの意味での成熟に由来するものと思われる。一つは真相糾明運動も含めて、長年の済州の人々の4・3に対する向き合い方の成熟である。真相糾明運動の成果を踏まえながらも、それを相

対視することができるようになったということなのだろう。もう一つはインタビューたち個々の成熟ということがある。年齢、職種、経験、知的な幅、そうしたものが相まつの相対感覚と責任意識、それが4・3に対する視点の硬直を回避させると同時に、4・3も済州が抱える多様な問題の中のきわめて重要ではあるが、それでもやはり数ある中の一つの問題といった相対感覚を可能にしているのではなかろうか。

実は、インタビュー前に期待していた「個々人の興味深い4・3表象」というものを、あまり聞くことができずに筆者は少々落胆し、その分析に難渋したあげくに、実はそれは上で述べたような責任感、相対感覚が「面白そうな私的4・3物語」を押しとどめさせていたからかもしれないと筆者なりに思いあたったのである。そうした「気づき」から見れば、そうした躊躇い、判断留保にこそ、現代の済州に生きる成熟した世代の新たな4・3表象、或いは4・3との付き合い方の芽生えが見いだせるのではなかろうか。それは性格上、大きな声にはならず、往々にして見過ごされてしまう。しかし、社会の実質的な変化というものは、日常のあらゆる場に浸透した深慮に基づく言動によって徐々に準備されていくものとする筆者としては、躊躇いのなかで熟成する深慮に基づく低い声の実践に期待しないわけにはいかない。

第5章 インタビュー内容の分析・考察の (2) 一文学的表象と未体験世代 の事件表象との関連一

本章では、4・3を一般に知らしめるにあたって重要な役割をしてきた文学作品、言い換えれば4・3の文学的表象とインタビューの事件表象との関係について考えてみる。

インタビューたちが4・3と出会い、その実相を理解するにあたって影響を受けた文学作

品としては「順伊おばさん」(玄基栄)、「龍馬の夢」(玄吉彦)、「漢拏山の空赤く焼けて」(韓林和)などが挙げられている。そして、その中でも「順伊おばさん」が最も有名で、インタビューの証言の中でも圧倒的な存在感を示しているが、それについては長くなるので後に回して、他の二作品とインタビュー(そして、そこに伺われる一般読者)との関係について考えてみたいのだが、個々の作品の分析に先立って、文学作品一般と読者との関係について考察する際の筆者の原則を記しておきたい。

筆者は「誤読」というものについて否定的に言及しない。誤読も一つの読み方として、尊重し、「誤読」と「正読」に価値の上下をつけない。そもそも「正読」というのがあるのかどうか判然としない。また、作者のメッセージを最優先、最上の価値とするような立場には立たない。文学作品と読者の関係の歴史というものは、おびただしい「誤読」の歴史に他ならず、誤読を否定的に云々するなら、読者の自由は否定されてしまいかねない。しかも、本稿のインタビュー内容でも明らかなように、インタビューたちははかつての自分の誤読もしくは作品に対する誤った先入観についてしばしば言及しており、その「誤読」が実はその読者に大きな影響を与えたのかもしれないという可能性も否定できない。さらに言えば、そんな「誤読」を経て最終的には「正読」に達したと当人は思っているだろうが、実は、そのような複数の人々が細部に立ち入って互いにその「正読」を提示して対照でもしてみたら、驚くほどの差異が判明するかもしれない。

というわけで、以下では作品に対する読者たちの誤読の可能性とその誤読の理由やそれが意味しそうなことについて議論するが、誤読そのものについて否定的に言及しているつもりは全くないのである。

1) 玄吉彦の「龍馬の夢」―中央権力に物語で抵抗する辺境の民

玄吉彦の「龍馬の夢」はそのほかの2作品とは異なり、4・3を題材としていない。

独立王国であった耽羅国（済州の古名）が本土の中央権力に次第に組み込まれ、ついには完全に支配下に収まって以降、その搾取・収奪に苦しめられてきた済州の歴史。それでも圧倒的な差異がある力関係を転倒することなど、現実には不可能である。そこで、人々は物語の形で現実には不可能な権力の転倒の夢を紡ぎ、語り伝えてきた。そうした済州固有の口碑文学の伝統の延長上で、済州の民衆の抵抗の形を形象化した作品が「龍馬の夢」なのである。それは横暴な中央権力への反抗という意味では、4・3と通じる側面がたしかにある。しかし、その小説が指し示す抵抗の形は、4・3糾明運動のようなものではない。

「龍馬の夢」では、武力闘争がたとえ一時的に成功したとしても、その後には済州の民衆が更にひどい苦難を抱え込むことになってきた歴史に鑑み、現実の権力関係の転倒ではなく、語り（夢）の中での抵抗と勝利でもって現実の権力関係の転倒にとって替えるのである。したがって、抵抗運動を希求し推進する人々からすれば、無抵抗、悪く言えば、敗北主義の烙印を押され、そのあげくには唾棄され敵視されかねない作品なのである。

しかし、少なくとも中央権力による理不尽な収奪、横暴に対する辺境の弱小済州民衆の抵抗精神の具象化が、当時の済州の若者たちの地方感情を刺激し、本土の官憲に対する抵抗意識を鼓舞して、4・3の運動に駆り立てた可能性がある。それは、誤読の一種、少なくとも一面的な理解のされ方の他ならないのだが、時代によって、さらには読者によって作品が多様に読

まれるのは特殊なことではない。しかし、今や『報告書』に対する厳しい批判を展開して4・3の運動圏の人々から悪罵を浴びている玄吉彦によるこの作品が、この時代にはそうした運動圏もしくはその周辺の人々をも鼓舞したようなのだから、書物と時代の潮流との関係というものは実に微妙であることを今更のように痛感させられる。そして、民主化運動の高揚期における4・3運動もまたほかのあらゆる社会運動がそうであるように、呉越同舟という側面が数多くあったことが、例えば『龍馬の夢』に対する理解にも現れており、「呉越同舟」だったことが判然とするには20年以上の歳月が必要だったわけだが、その歳月がもたらしたものこそ本稿が関心を注ぐ未体験者の現時点における4・3との付き合い方に他ならないのである。

2) 韓林和の『漢拏山の空赤く焼けて』―ヒロイズムの高揚

次いでは韓林和の『漢拏山の空赤く焼けて』である。これについては金東潤（2003）の議論が実にコンパクトに整理されているし、その議論を土台にしたほうが筆者の言わんとすることが鮮明になりそうなので、引用する。

国内で最初に4・3を長編化した作品は韓林和の『漢拏山の空赤く焼けて』（1991）である。この小説は、蜂起指導者であった李徳九の1947年「3・1事件」から1949年6月初めに死亡する時点までを、日誌形式で描き出した。海州大会に参加するために島を脱出した金達三と比べて済州に残って最後まで戦って最期を迎えた李徳九を英雄的に描いている点が目を引く。ただし、李徳九の伝記的事実に関する間違いや、作中人物たちの性格や行動などが生命力を欠いているために、小説全体が緊張感をなくしている

⁹ 金東潤（2003）、69-70

面があるといった欠陥がある。そうした点が、この作品が4・3を最初に長編化したという点ではそれなりの意味を持ちながらも、読者たちの反応が微温的だった要因と思われる。(筆者記)

金東潤は韓林和の企ての意味を4・3文学の系譜上においてある程度認めつつも、その一方で作品としての欠点を2点指摘しているが、その一部について筆者には違和感がある。指摘された欠点の一つは「作中人物の性格や行動などが生命力を欠いている」という点であり、なるほどそれなら作品として相当に深刻な欠点だということになるのだが、筆者はこの作品に関してまだ十分な検討ができていないこともあって、判断にためらいが否めないもので、それに関する言及は避ける。しかし、もう1点の「伝記的事実の誤り云々」については、何重にも異論がある。この作品が現時点での研究結果からみて、伝記的に誤りがあるのは確かなことなのだが、それを指摘することと、それが作品の価値を貶めているという判断とは、必ずしもつながりはしないはずである。

そもそも実在の人物を題材にした小説は、その人物の伝記的事実に忠実でなくてはならないという考え方に筆者は必ずしも与しない。間違いがあっても仕方ないし、素材はあくまで素材である。小説と銘打ったとたんに、歴史的事実の拘束から脱して、想像力を働かせるのが作家の仕事なのである。但し、読者に対する配慮が重要だろう。名を知られた実在の人物に関して、常識とあまりにも異なる伝記的事実を書いて、読者にリアリティを感じさせることができるかどうかというのが最大の問題であって、それさえクリアできるなら、伝記的事実の誤りなどは小説としての欠点ではないというのが筆者の立場なのである。

そうした筆者からすれば、作家はその伝記的

誤りを知っていてそうしたのか、或いは、その小説が執筆された当時の常識では、そうした誤った伝記的事実が広まっていたのか、ということのほうが気にかかる。もしそうした伝記的誤りのほうが常識と化していて、作品もそれを踏襲したのなら、作家にも作品にもなんら不名誉なことではない。或いは逆に、誤りだと承知しながらも作家があえてそうした誤った事実を書き込んだとしたら、それは作家の意図にはかならず、それをこそ検討すべきだろう。筆者はそのどちらが正しいのか判断するに足る情報を持っていないので、あくまで推察なのだが、主人公のヒーロー的性格を強調するために伝記的事実を膨らませた程度のことは作家が(意識的、無意識的とを問わず)したのではないかと想像して、もしそういうことなら、その「誤り」というものはむしろ、作家自身が意図した(あるいは計算した)ものであり、この小説の性格(ヒロイズム)の一端にすぎないということになる。

ともかく、そうした伝記的誤りを含めた小説のそうしたヒロイズムを称揚するような性格が、一部の読者には大いに受けたのだろう。それは金東潤の評価とは異なるが、作品というのは読者によって正反対の評価がされたりするのは普通のことで、とりわけ、時代の雰囲気というものが多くの読者の読みを拘束することは、今しがた『龍馬の夢』で見たとおりである。しかも、運動圏の若者たちは一般に、この作品のようなヒロイズムを好む傾向を持っていそうだし、済州の若者にとって主人公は済州出身の先達で、しかも悲劇のヒーローである。さらには、左翼的民族解放運動に対する免疫があまりなかったに違いない当時の韓国の学生青年層には、金東潤が指摘している欠点など作品読解にあたって何の障害にもならなかったのではなかろうか。

「龍馬の夢」が一種の誤読によって歓迎され

たのとは反対に、『漢拏山の空赤く焼けて』では一部の読者が作者の意図に過剰に反応して主人公に一体化したということになりそうである。それが作品として幸福と言うべきか不幸と言うべきかの判断は分かれるところだろうが。

但し、以上は本稿にとっては、実はそれほどたいした問題ではない。むしろ問題は、『漢拏山の空赤く焼けて』のような作品によってヒロイズムに火をつけられた読者たちが、或いは、たとえそのような作品を読まなくても同じようなメンタリティを持っていたり、時代の雰囲気感應した若者たちが、その後どうなっていくか、である。ヒロイズムもたいていの場合には寿命があり、しかも、それは甚だ短いうえに、「ちまちま」とした日常とは折り合いがよくない。時が流れるにつれて、現実社会の圧力もあって、当人は愚痴をこぼすだろうが、それもやがては過去の追憶となり、ヒロイズムという表皮ははがれる。そうした人々がその後、どのように4・3と付き合っていくのか、それもまた、本稿でインタビュー어의語りを通して考えたかったテーマである。ヒロイズムに燃えた若い人たちが実生活に入って以降、その経験をどのように内部で咀嚼して、社会と付き合っていくのか。その社会とは4・3とは無縁ではない済州社会なのである。これについては前章の末尾で筆者の曖昧な感触を述べたが、それ以上に立ち入って議論する用意がいまだ筆者には整っていない。

3) 玄基栄「順伊おばさん」―再発見される悲劇という「物語」と、読者による悲劇の新発見との誤差＝語りと伝承の共同体の消失
最後にはもちろん、一般に4・3小説の代表と評価され、インタビュー어의多くも言及している「順伊おばさん」である。

その作者である玄基栄は、その作品のせいで逮捕されて拷問を受け、作品も禁書扱いになる

といった筆禍事件もあいまって、4・3真相糾明運動のシンボリック的存在であり、その作品も4・3小説の代表として有名なばかりか、実際に影響力も甚大である。そこで、その作品と読者、とりわけ、事件に遅れてきた未体験世代の読者との関係に焦点を絞って考えてみる。

「順伊おばさん」は、語り手が順伊おばさんのトラウマ的言動と病的症状、さらには不幸な死を通して、4・3を再発見していく物語であり、読者は語り手によるそうした再発見の道筋を通じて、4・3を発見することになる。このように、闇に閉ざされてしまっていたし、自らも記憶から追いやっていた歴史を語り手自身が再発見していく過程が、読者による事件の発見に重なることが、その物語内容の衝撃性を一層高めると同時に、読者の作品への一体化を促して、その作品の影響力をますます強くしたのである。

ただし、そうした相似性には少々微妙な問題がある。というのも、既にお分かりのように、語り手は発見するのではなく、再発見するのに対して、読者たちは発見する。相似してはいるが、内容的には差異がある。その差異に注目してみたい

「順伊おばさん」の語り手は、事件の体験者であるばかりか、語りの共同体内部で事件を「耳にタコができる」くらいに刻み付けられ、だからこそ、事件に代表される悍ましい物事が積み重なった現場から逃亡して、できる限りそこに戻ることをさけて暮らしてきた。しかし、順伊おばさんの死を契機にその語りの共同体へ、つまり、事件を体験し、それを絶えず語り合うことで確認してきた記憶と語りの共同体への回帰を果たす。

それに対して読者は、とりわけ事件から一世代以上後に遅れてやってきた未体験世代の読者たちは、「順伊おばさん」を読むことで、語り手の体験を追体験することで新たに事件を発見

する。それは同時に、伝承から疎外された世代が、「順伊おばさん」ほかの文学作品や4・3にまつわる運動や、4・3に対するメディアによる情報の沸騰などを通して、自らは排除されてきた伝承の共同体を発見するということでもある。その両者の間には、体験もさることながら、伝承の共同体、語りの共同体の有無という差異がある。

さて、その差異については実は既に触れて、そうした共同体が消失したのか、或いは女性だからそうした共同体から排除されていたのかという二つの可能性を上げたが、ここではさらに一歩進めて、男女を問わずそうした共同体そのものが消失したものと仮定し、その理由は何かという方向で考えてみる。つまり、「順伊おばさん」の語り手の世代とその作品と青春期に遭遇する未体験世代との間には、ある種の社会変動、大げさに言えば、伝承の共同体の崩壊という事情があったのではなかろうかと仮定するのである。その仮説を実証することは本稿の枠を大いに逸脱してしまうし、そもそも筆者の手に余る。しかし、あえて記して、本稿の延長上に構想している本研究への道筋をつけたいと考えた。

1960年半ばから1970年代中盤にかけて、濟州は人々が身を寄せ合ってようやく生き延びることができるほどの貧しさから、個々の家庭単位で暮らす算段ができるような経済水準になる。例えば、村の収穫物を狙って他所の村からやってくる泥棒から村を守る夜回りのための詰め所が、ほとんど無用になって打ち捨てられるのが1960年代の半ば以降なのである。盗みを働かなくても食べられるようになったので、防犯の夜回りの必要もなくなったわけである。それは、60年代に本格化するミカン栽培、日本への密航

者からの送金、在日からの膨大な援助、朴大統領肝煎りの観光開発やセマウル運動などが複合した結果である。そして、そうした経済水準の上昇に伴って、人間関係にも微妙な変化が進み、伝統的な村落共同体の秩序がほころびはじめる。

そして水道、電気、交通網、学校施設などの整備が進み、1970年代から1980年代にかけては、新しいメディアとしてのラジオ、テレビの普及が進む。その結果、かつての共同体内部の語りによる伝承が、匿名的なラジオ、テレビに取って代われ、共同体の内部で練りあげられていた語りの機能、そして影響力が甚だしく衰退し、ごく当然なことに世代間の伝承が機能しなくなる¹⁰。

先にも記したように、これはあくまで仮説にすぎないが、「順伊おばさん」の語り手の世代における「祭祀文学」、言い換えれば「祭祀の場に代表される経験の口頭による伝承としての口碑文学」がはっきりと衰退するのが1970年代前後だったと思われる。

そうした語りの共同体の衰退が「順伊おばさん」の語り手の世代と本稿が対象とする未体験者世代の間にあったと仮定すると、もっぱら「順伊おばさん」の語り手の世代の4・3表象を特権化して、それに近づくことを希求することには無理があることに気づかざるを得まい。大人として4・3を経験した人々、そして「順伊おばさん」の語り手の世代、さらには、未体験者世代固有の4・3表象などのそれぞれを尊重し、それぞれの固有の問題を明らかにしたうえで、それら相互を対照すべきではないか、ということになるだろう。そこで筆者は、未体験世代の固有の4・3表象こそが、語りの共同体の消滅した現代における、4・3表象にはかならず、それはまた未来の4・3表象の一つのモ

¹⁰ 濟州村落共同体の60年代70年代における構造的変化については、玄善允（2011）が玄容駿（2004）を論拠に

議論を展開しているので参照のこと

デルになるものと期待するのである。

第6章 まとめにかえて—4・3表象の「民主化」を求めてのはるか長い道のり—

既に触れたように、本稿は筆者が相当に長期的なスパンで構想している「4・3に関する表象の研究」の予備的な試みにすぎず、先ははるかに長い。というのも、4・3表象全般というのはすこぶる広大な領域をもち、それを包括的に対象にするのは至難の業なのである。例えば、4・3表象の一部にすぎない文学的表象でさえも、それを総括的に扱っている研究はいまだにない有様なのである。4・3の文学的表象を扱った研究の中では本稿で言及した金東潤(2003)が最も包括的なものののだが、それでも朝鮮半島に限られており、朝鮮半島における4・3表象に相当な影響を与えたと思われる在日作家である金石範や、韓国ではあまり著名でなくても日本では、おそらくその金石範と勝るとも劣らないほどに4・3表象を主導している金時鐘などは対象外となっているのである。

そうした事情に鑑みて、筆者は当面、その空白を一つ一つ埋める作業を進めるつもりである。例えば、今しがた触れたばかりの在日文学者の4・3にかかわる文学的表象、そしてそれを含む在日総体の4・3表象などもそれぞれその一つであり、本稿のような未体験者による4・3表象もまたその一つというわけである。

さて、その未体験者の4・3表象というテーマは、管見の限りではほとんど未開拓な研究領域ということもあって、本稿ではその研究の意義、そして使用タームや概念の定義に相当な紙幅を費やさざるを得なかった。表象に関する議論がそうであり、非体験者の下位にカテゴリとして設定した未体験者に関する議論もそうである。それらの議論はいまだ言葉足らずなうえ

に生硬で、論理的にも欠陥が露呈しているに違いない。高誠晩や村上陽子からのアイデアの借用についての説明も、筆者自身はともかく、読者には直ちには納得がいくものでないかもしれない。しかし、現時点での筆者の方向性とアイデアを可能な限り提示して、今後の研究の進展に伴ってより精緻で理解が容易なものに仕立て上げたいと念じ、あえて書き記した。

因みに、これまたまことに恥ずかしいことなのだが、本項で紹介したインタビューを行う以前に、以上のような研究の方向性が確立していたわけではなかった。ぼんやりしたイメージのようなものはあったが、インタビューを行い、それを分析する過程で、次第に今後の研究の方向性が具体的に浮かび上がってきた。したがって、本稿の構成上では、研究の方向性に関する議論の後にインタビューの紹介と分析という順序になっているが、実際にはその両者は同時並行的に進んだものだった。そのせいもあって、本来ならば、研究の方向性に適合したインタビュー項目を設定すべきところなのに、必ずしもそのようにできていないなど不備が目立つ。そもそも、インタビューを開始した時点では、未体験者の4・3表象というテーマが調査・研究として遂行可能かどうかさえも定かではなく、恐る恐る、「とにかく始めてみようか」といったレベルだった。しかし、とにかく一歩踏み出したおかげで今後のインタビューその他の調査の方向性も相当に具体的になった。例えば、量的調査ではなく、質的調査に重心をかけて、本稿では実現できなかった濃密で繰り返しの聞き取り調査が必須なことを痛感した。それを言い換えれば、未体験者の4・3表象の生成に寄り添う努力をしてみようと思うに至ったのである。本稿はそれだけでも筆者にとっては大きな成果ということになる。

本稿で筆者が試みたことを一言で表わすと、4・3表象の「民主化」ということになるだろ

うか。4・3の真実や体験者の表象の「専制」に対して、体験者であれ、非体験者であれ、未体験者であれ、それぞれに固有の4・3表象があって、それぞれを尊重して、価値を認めようとした。但し、誤解がないように付け加えれば、ここで用いている「専制」という言葉に否定的含意は全くない。歴史的真相という1点に収斂していく禁欲的な追及はそれとして尊重しはするが、筆者はその方向を選ばないというだけのことである。事件よりは日常、収斂よりは拡散、過去よりは現在と未来へと多様に開かれていく、そうしたものとして、4・3表象をイメージして、そうした多様な表象を内部で育んでいくに違いない未体験者の証言と付き合っていきたいと思う。そしてその際に、そうした筆者の方向性が、4・3の真実を糾明する方向性と比べて優劣があるなどとは考えないように努めたい。それこそが、筆者がインタビューを試みだし、今後も試みるつもりである未体験者の皆さんへの最低限の礼儀だということを、肝に銘じておきたい。

本稿ではただの「芽生え」レベルにとどまった本研究の目的と方法を、今後に予定している調査・研究ではより明確な形で展開できるように努める所存である。

謝辞

本稿は学振科学研究費補助金基盤研究（C）「トランスナショナルな視座からの済州4・3文学の解明」（課題番号）15K02454、研究代表：姜信和（名古屋大学）の分担研究者としての成果の一部である。記して関係諸機関と関係者に謝意を表したい。

また、インタビューを快諾するのみならず、4・3研究に関連して様々なアドバイスをしてくださった皆さんに改めて感謝の意をお伝えしたい。本当にありがとうございました。

参考文献

- （日本語文献）
 高誠晩（2012）：紛争後社会における大量死の意味づけ—沖縄戦の戦後処理と済州四・三事件の過去清算の事例から—、『ソシオロジー』第57巻1号、59-74
 高誠晩（2015A）：「済州4・3研究の現況とその文学的表象の位置」、2015年6月13日、立命館大学茨木学舎での「第1回済州4・3文学研究会」における口頭発表に際してのハンドアウト。
 高誠晩（2015B）：「大量死の意味をめぐるローカルな知の生成と実践—済州4・3事件の民間人死者および行方不明者にまつわる父系出自集団の記録をめぐる—」、『文化人類学』79巻4号、378-396
 村上陽子（2015）：『事件の残響—原爆文学と沖縄文学、インパクション』
 大村益夫編訳（1996）：『耽羅のくにの物語』、高麗書林
 玄善允（2009）：『植民地地域交流史研究に関する一考察—ある済州島人一族にとつての大阪と教育—』、独立行政法人日本学術振興会、平成18年度～平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、『植民地期東アジアの近代化と教育の展開—1930年代～1950年代—』、263-290
 玄善允（2011）：「龍王宮から済州へ、そして再び龍王宮へ—済州に関する「常識」と「在日二世の信憑」と「村落共同体の構造」—、『龍王宮の記憶を記録するために—済州島出身女性たちの祈りの場—』、52-65
 玄善允（2015A）：玄善允、森本由紀子共訳、玄吉彦著『戦争ごっこ』日本語版（岩波書店刊）訳者後書き、259-274
 玄善允（2015B）：「不就学女性の生活の中での「学び」—植民地下の朝鮮済州島で生まれ育った女性のライフストーリーと「学び」—」、独立行政法人日本学術振興会、平成23年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（B））『研究成果報告書』、87-105
 玄善允（2015C）：「玄吉彦の『真相報告書』批判について」、第1回済州四・三文学研究会、「済州四・三研究の現況とその文学的表象の位置」における口頭発表の際のハンドアウト
 玄善允（2016）：玄吉彦著『島の反乱』日本語翻訳版（訳者玄善允）訳者後書き、同時代社（韓国語文献）
 玄基栄（1978）：『순이삼촌』（順伊おばさん）、創作と批評社
 玄吉彦（1984）『용마의 꿈（龍馬の夢）』、文学と知性社
 韓林花（1991）：『한라산의 노을（漢拏山の空赤く焼けて）』、ハンギル社
 金東潤（2003）：『4・3의 진실과 문학』（『4・3の真実と文学』）、刻
 玄容駿（2004）：『靈』、刻